

作文教育の振興について

堀江 マサ子

一、はじめに

人が人間として、主体的に生きていくには、作文することによつての自己確立が大切である。自分というものの存在は、さまざまな表現手段によつて確めることができる。その中でも作文は最も大きな要素となりうると思われる。書くことによつて考え、考えることが書くことになり、自分の存在が見えてくる。そういう意味でも作文の重要性はあると思う。

作文教育の振興が提唱されてから久しいが、それをどんな視点に立つて、どのように実践していけば良いのか、また、その要は何なのかの研究はまだ定論を見ない状態である。私自身、過去二十五年の教員生活の中から、その要点を列挙してみると、

- (一) 読むことと書くこととの関連を密にさせること。
- (二) 指導者の書く生活と深く関連づけること。
- (三) 書くスタイル(文章スタイル!心のスタイル)を与え

ること。

(四) 書く抵抗を取り除いてやること。

(五) 個人指導!全体指導を密にすること。

(六) 「書く」楽しさを会得させること。

(七) 読みの姿勢の確立を作文によつて定着させること。

(八) 作文における引用の的確さを把握させること。

(九) 身近な作文例を示すこと。

(十) 視写を通して基礎的書く態度を養うこと。

などである。これらの要点は相互に関連し合つてこそ作文教育は振興していくものと思われる。それぞれの要点がどう指導に生かされたかを、次の指導の実際から見たいと思う。

二、指導の実際

いくつかの指導例を一覧としてあげると

授業の中で

例一 「水の東西」山崎正和（教科書）一年

※「水」（別の作品）についてのプリントによる
重ね読み

← ※「水」に関する作文

例二 「バツタと鈴虫」川端康成（教科書）二年

二つの対立する概念をテーマに作文

例三 「平家物語」（教科書）一年

※永井路子著「平家物語の女性たち」を参考に
「平家物語の女性たち」をテーマにしたプリント
によるそれぞれの生きざまを学習

←

※「平家物語の女性たち」の中から一人選んで作
文

例四 「古事記」（教科書）二年

※教科書及び教科書に抜けている部分のプリント
による学習（特に「おとたちばなひめ」と「みや
ずひめ」の違いに注目しての学習）

←

課題を見つけて作文

例五 「歌」（教科書）一年

※教科書「万葉集」「新古今集」「短歌」「俳句」
の学習

←

※私の「歌、歌、そして歌」（雑誌「いずみ」よ
り）をプリントで読む。

←

※歌を自分の心にくぐらせて「私と歌」という題
で作文

例六 「詩」（教科書）二年

※教科書「宮沢賢治、中原中也、石垣りん、など
の作品」の全体学習により授業での詩の読み取り
方の学習

←

※私の「中原中也論」（文芸部誌「ながれ」より）
をプリントで読む。

←

詩人を一人選びその詩人論を書く。

例七 古典「平安文学」（教科書）二年

※古典「平安文学」を読む。

←

※私の「平安日記文学の精神」（文芸部誌「なが
れ」より）をプリントで読む。

←

※古典の中から一作品または一作者を選びその小
論文を書く。

例八 現代文「元始、女性は太陽であった」（教科書）

三年

※現代文「元始、女性は太陽であった、平塚らいてふ」を読む。

※私の「女性師の生活の向上について」（雑誌「教師の広場」より）をプリントで読む。

例九 「女性の生き方」に関する小論文を書く。

例十 高校三年生への論文指導「源氏物語」など 三年授業以外で

例十一 全校生徒による読書会

※「高校生のための静岡県文学読本」を読む。

※全校生徒は簡単な感想を書く。

例十二 「新聞コラム欄の視写（毎日の各自による家庭学習）などである。例八について詳述する。

平塚らいてうの「元始、女性は太陽であった」は、女性の意識を鼓舞するものとして、意義あるものである。歴史的に見ても画期的な作品である。生徒自らも自分の人生の入口で模索している時期であるから、この教材を「女性の生き方」として単元化した。らいてうは日本の女性の先がけとしてこの文章を書いたと思われる。しかし、私自身、自分の実人生と照らし合わせてみるとしっくりこない部分がある。だから、まず、らいてうの文章を読み、彼女の主旨を理解させ、その上で私自身の生き方の文章を読ませた。

そうして、二つの別の側面から捉えた文章を踏まえて、「女性の生き方」の小論文を書かせた。

私の文章の一部は次のようなものである。

「女教師の生活と

その向上について思うこと」

宮本武蔵のことば「我事に於て後悔せず」を、小林秀雄は「我が事に於て」と読み、「後悔などというお目出たい手段で自分をごまかすな、今日まで自分が生きてきたことについて、その掛け替えのない命の持続感をもって」と解釈した。私がこれまで生きてきた道をふり返ってみると、女性として、妻として、母としての生命の持続感にすぎなかったような気がする。

（中略）

曾野綾子は「女性が職業を持つということに関して」次のように言っている。

「これはたいへんなことですね。まず、プロとアマははっきり別だということです。プロは言いわけがきかないんです。だから例えば、翻訳を業として請け負ったら、子どもが病気であろうが、亭主が死のうがやらなければならない。という人がいる。これがプロです。それがいやなら、プロにならないことです。どっちか捨てなくては。両方欲しがっちゃだめなんです。」

私はこのことばに従った。プロにならなくて、ともいっても心に銘記していた。子どもが病気でも必要な処置をして

学校へ出た。一日中病気の子どもを家に寝かせて、職場から帰った時、私は急に優しい母親になった。いつもはそんなことをしてはやれないのだが、声がカラカラになるまで子どもの好きな絵本を読んでやった。「醜いあひるの子」を読み終えた時、幼い娘が急に泣き出したことがあった。不思議に思つて尋ねると、「おおかあちゃんがいなくなつて、一人で寝てた時のことを思い出して。あひるさんがかわいそうで。」と言うのである。その時は私まで泣いてしまった。

(中略)

私が歩いてきた道は、私が求め続けてきた道は、ある時は学問や職業への飽くことのない情熱の道であつたり、ある時は冬の陽だまりの中で子どもと笑みを交わし合つた母親としての充実感の道であつたりした。「どっちか捨てななくては。両方欲しがっちゃだめ。」と言つた曾野綾子さんの言葉に従ひ切れず、あれもこれもと欲ばつてしまつたような気がする。そうして私の手もとに残つたものは、不燃焼のままの、情熱の残骸でしかないのかもしれない。平凡な私の魂は、平凡な私の才能は、その平凡さ故に捨て切れずにさ迷ひ歩き、あつちへぶつかり、こつちで故障をし、不燃焼のまま終つていく。仕事をもち、それに生きようとして跳び上がったまま足を折つて、もう後は松葉杖でしか歩くことができない現在の私である。

今年「国連婦人の十年」の最終年。国連婦人の年に生まれた長女はもう中学二年生になる。「女教師の生活の向

上」が叫ばれ、私も自分の実人生を実感していなかつた時は「女教師の生活の向上」を叫んだ一人でもあつた。しかし、自分の重い実人生をふり返つてみると、そう叫ぶ勇気が出てこないのが実情である。世の中には、器用に職場と家庭を両立させているかに見える女性たちもいる。そう自分に信じ込ませている女性たちもいる。が、スーパーマンでも出てこない限りそれは無理なような気がする。「自分は誰の力も借りないで見事両立させている。」と大声で胸を張つて叫んでいる女性もしいたとしても、私は、自分の重い実人生に照らし合わせてみて、素直には信じがたい。それは、私が自分であることの限界であるかもしれないが……。今こうして半生をふり返つてみると、実に凡庸に、愚かしく、女性として、妻として、母として私はその人生を歩んできたかがわかる。それは、瞬間、瞬間、真剣に悩み、迷ひ、苦しみ選択してきた人生であるが故にかえつて、それだけ裏切られるということもあるのだ。

しかし、いつの世にも、女性は、女として妻として、母として、より多くの哀しみを背負つて生きなければならぬように思われる。苦しみや、悲しみや、哀しみのない人間なんて人間ではないし、より多くの物事を見聞き、経験することによつて、人は成長していくものと思われる。そういう意味でなら、女教師の生活(精神生活を含む)の向上はこれからも続くことと思われるのである。

こうして二つの異なった女性の生き方を通して自分の生き方を見つめ考えさせて小論文を書かせた。提出された小論文の三分の二ぐらいが女性の生き方に限界を感じているものであった。これは私の生き方の文章に影響されたからであろう。残り三分の一はどちらかといえば女性も強く生きていこうというものであった。それらの文章もらいてうのように手ばなしで女性も強く生きていこうというものはなかった。また、クラスで二、三人は人生論として捉えて書いているものもあった。

三年生の一学期という人生について深く考えている時期の課題だけにかなり真剣に作文していたように思われる。ただ、もし家庭女性として生きていく幸せのような文章があればもう少し別の角度からの小論文も出てきたのではないだろうか。

「女性の生き方に限界を感じているもの」の文例として次のようなものがあった。例文はすべて私の担任のクラスの生徒のものである。

「女性としての限界」 有賀紀子

私は陸上競技というスポーツを通じて、さまざまなことを考えさせられた。そして、「男女の違い」は、その一つである。

陸上競技に限らず、他のスポーツにおいても、男女が対戦し競い合うことはない。それが体力の違いであることは誰にでもわかることだ。しかし、残念なことに、体力が同

じであっても女性の方が後退してしまう要因を私なりに発見してしまつたように思う。

昨年、私はある合宿に参加した。その時、練習は男女いっしょにやるため、女子にとつてはきついものはずだった。ところが、どうだろう、同じ距離で同じ本数だということに、走り終わった時倒れ込むのはほとんど男子だった。要するに、女子は完全に走りきれていなかったのだ。しかし、それは楽をしようと、意識的にそうしたのではない。確かに女子も一生懸命走つた。そして、肉体の限界よりも先に限界だと思い込んでしまつたのだと思う。つまり、これは無意識の防衛反応であり、女子の精神的弱さなのだ。スポーツ観戦をしていて男子の方がおもしろいというのは、体力や迫力の違いだけではない。隠れたところで強大な精神力が支えているからこそ、人の心を動かせるのだ。

しかし、それだからといって、すべてを出しきる力が男性固有のものだとは思っていない。ただ、私が言いたいのは、そういった女性の弱さがスポーツだけでなく、多くの方面でさまざまな影響を及ぼしているのではないかということだ。

今、盛んに女性の自立が謳われているが、女性の持つ意識の中に欠陥があることに気づいているのだろうか。

女性はまず自己の全てを知るべきだ。そこから生まれる、ひたむきさをもつてこそ、女性の社会的自立も充分かなえられるものだと思う。

しかし、現代の女性は自己の欲求を満たすことに先走ってはいないだろうか。女性の社会的自立¹¹社会進出と直接結びつけてもいいのだろうか。

長い間、女性は差別的な制度で縛られてきた。しかし、それがいかなるものであったとしても、女性の果たしてきた責任というものがあつたはずだ。女性は今、そこを空白のまま立ち去ろうとしている。やりたいことができる、それだけでいいのだろうか。言いかえれば、現代の女性は不安定な土台の上にいるということである。私は女性自身の精神的弱さによって、この貧弱な土台はもろろん、女性自身も壊されてしまうのではないかと不安に思う。

女性が真の自立を遂げる時、自己に隠された本質を見極める時でもある。精神的弱さによって狭められた自己限界を最大限に広げること、それが女性の自立なのだ。

右の文例は、具体例によって小論文が生きている良い例であると思う。高校三年間陸上部のエースとして活躍した彼女の鋭い洞察力がうかがわれる。それが実感に基づいているから説得力を持つ。彼女は自分の論旨を自分なりの文章スタイルで書きあげ、「女性としての限界」の小論文として成功している。

これに比べて、女性として限界を感じつつも、その文章スタイルは平塚らいてうのものを借りているものもあつた。次の例は内容は私の影響を受け、文章スタイルはらいてうのスタイルで書いている。

「女性として生きるということ」 大石さおり
私は、女性として生を受けたことを、一度たりとも悲観したことはない。それは、私が女性というものを賢い生きものだと思えるからである。

古来、女性は弱き者、はかない者であるという観念が人々の頭を支配してきた。それは、女性に形のない影として生きることを強いた。彼らの生き方、そのすべてであつた。だが、やがて彼らはかわつた。ことばを知り光を知る人となつた。そして、口を開いて生きる権利を手に入れた。一方では、社会の中核にいて、時代の象徴ともなり、一方では、鬼の目をもつ優しき天使となつた。

だが忘れてはならない。

物事には限度があるということ。

今、まさに、彼らはそれを越えようとしている。

人として生きるあまり、我を見ることを忘れ、後を振り返ることを忘れ、髪をふり乱し、口にするもおぞましき姿で、日夜悪夢の笑いを浮かべている。

人として生き、それでもやがて、人生につかれ、ふと振り返った時、彼らには何が残っているのであろう。

だから、忘れてはならない。

私たちは、人であるとともに一人の女性であるということとを。

右の文例はらいてうの文体そのものである。また別らいてうの文体そのものではなくても、その雰囲気書いた

小論文も多かった。

思考が柔軟な高校生にとって、授業で読んだ文章のパターンはそのまま生徒の文体となって生かされる。それは内容だけでなく、文体、ことばづかいに至るまでである。

「どちらかといえば女性も強く生きていこうと」というものもかなりあった。その一例を示すと、

「女性の生き方」 鈴木郁子

「美人は美人に生まれた時点で人生の七十パーセントにおいて成功したといえる。」——もうずいぶん昔の話なので、誰に聞いたかも覚えていないし、この七十パーセントという数字に根拠があるか否かも謎だが、考えてみればこの私に向かつてこんなことばを言うなんて相当失礼な輩である。どういふふうに失礼かはさておいて、その女性の生き方に、容姿という要素が少なからず影響するのは確かだろう。もちろん男性にだって外見のよしあしはあるだろうが、女性のそれほど決定的な感じはしない。これは、男性より女性の方が、「観賞物」としての意味合いが強い、ということだろう。

私はチラシの類をあまり見ないが、それでも最近目につくのが、エステティック・サロンなどの広告である。美しさを金で買うわけだ。自分の商品価値を高めようとして——とまでいふと言いすぎだが、当たらずとも遠からじだと思ふ。若い女性は皆、ある程度自分は「花」だと心得ている所がある。そうして、「花」ならば美しくなければ意味が

ない。

しかし、エステティック・サロンなどの繁盛のうらには、女性の購買力の向上があるはずである。これは女性の地位の向上を示している。

女性の地位の向上。つまりそれは、「花」以外にも生きる道がある、ということではないだろうか、もちろん「花」として生きたい人はそれでもよいだろう。悔いのないような精一杯綺麗に咲けばよい。しかし、私はそうはなれない。花はいずれ枯れるものだ。これは半分負け惜しみだが、私は手元に残らないものは不安だ。

どちらが幸せとは分からない。だが、私はこちらにいて、あの人たちはあちらにいる、それだけのことだし、ひよつとして私はこう言いながらもあちらにいたかつたのかなあ、と思うときもある。しかし、人生の七十パーセントにおいてすでに失敗したとだけは、考えたくないのである。

右の文例は具体例の的確さとその論旨への結びつけ方と展開のしかたにおいて人を納得させるものがある。自分なりの人生観を持ち、その人生観から物事を見、自分なりの文章スタイルを持っている生徒である。

「人生論として捉えて書いたもの」には、次のようなものがあつた。

「変な奴」 吉田明子

私は行く先々で、変わり者と言われている。また私自身も自分を変な奴だと思ひ、一日でも早く自分の目指す変わ

り者になるため日夜努力を続けているつもりだ。私の人生は人と同じく生きることを拒む反発に溢れたものなのである。

「他人と同じく生きない」とはどういうことか。それは、自分が自分のためだけのコンパスを持って生きることである。普通のコンパスは大抵北を示しているが、自分の生きたい所が南東だったりしたら必要なのは正しく南東を指示してくれるコンパスだ。普通の人には全く役にたたないものが、今の私には必要不可欠なものへと姿を変える。自分の生きたい方向が分かっている限りには。

もうすこし言い方をかえれば、私の生きるべき道は、他人による呪縛から逃れるための道だということになる束縛ではない。もはや呪縛だ。周りの人間、特に大人たちは、人間の自主性を叫ぶ一方で私たち子供を縛ろうとする。はっきり言って、大きなお世話だ。私のしていることが犯罪にすぎないというのなら話は別だが、ただ自分たちができなかったことをさせるために私を縛るのはやめてほしい。私は誰かの第二の人生を歩むためのロボットとしてここに生をうけたのではないのである。

私が私の考えを述べれば、他人は私に後悔するぞとか、社会で生きていけないと言う。必ず言う。そんなことは百も承知だ。むしろ、人は親切で言ってくれているのだろうが、私だってその覚悟が全くできていないわけではない。どんな生き方をしても必ずいつかは後悔するのなら、いっそ現在の私が望むとおりの生き方による後悔を背負ってゆ

こうではないか。

少々まとまりがない文章になってしまったが、私はほぼ全ての人間が肯定する「うまい生き方」ではなく、子供の自分の通りたい道を走ってみたいと思う。それはいつか、今の私がこの世に存在したという証になるだろう。

右の生徒は三木清の「人生論ノート」を愛読しており、ある意味で自分の人生を自分流に歩んでいる生徒である。それが彼女にとってはごく自然な歩みとなっているのである。

三年生の現代文は当時三クラス担当していたが、私の受持ちのクラスがその中でいちばん深く自分の人生をひとりひとり考えていたように思う。これは指導者とかかわりの濃淡によるのかもしれない。人が発することは、文章と、その受け手との間のコミュニケーションを考えさせられた授業であった。担任のクラスの生徒とは、この教材を扱う前に進路について個人面接しており、朝の十五分のショートホームルームでは短い文章を毎朝プリントして紹介していた。その内容は人生を考えさせるものが多かった。その指導も影響していると思われる。

なお、この授業を大学入試の小論文に引用した生徒や、またこの小論文を機に書くことが好きになり、旺文社読後感想文コンクールに応募して全国二位となったりした生徒がいた。

「女性の生き方」を高校三年生の一学期に考えさせるこ

とは意義あることと思われる。自分のこれからの人生を考
えてない生徒はいないと思われるが、それを書くことによつ
て確かめ次の構想へと進んでいかせる。人生についていく
つかの側面を与えた上で、二つの内容も形も異なった文章
を読ませた効果はあつたと思う。

さて、本校において全校生徒による読書会が毎年行われ
ている。テキストは「高校生のための静岡県文学読本」で
あり、三年間かかつてその近代文学編はだいたいの生徒が
読み終え感想を書いて提出している。授業以外でのこうし
た読むことを書くことに定着していく試みはなされている。

その本の中に川端康成著の『有り難う』が収録されてい
る。その感想の中に、「この作品は、ひとつの曲のような
ものだと思う。『今年の柿は―』で始まり『ありがとう』
の連呼、そして『ありがとう』の連呼のあと最後は『今年
の柿は―』でしめくくる。この一つの旋律が、娘をうりに
出す前の悲しい雰囲気をおおいかくし、すがすがしい気分
で読み終わらせてくれる。」という感想もあつた。生徒個
人個人が書物と向かい合つて、作品の奥まで入り、しかも
それを表現読みにまで結びつけている読みの主体の確立が
ある。

また、授業以外での指導に、新聞のコラム欄の視写を生
徒に課している。入学してすぐの授業で毎日コラム欄を視
写することを約束させる。そして週一回まとめて提出する
ことを約束させた。多くの生徒は視写だけで提出していた。

しかし、最後はクラスの中で数名、感想をも書いて提出し
ていた。中には、わからないことばの意味までも辞書で調
べている生徒もいた。また、コラムの中の重要な箇所
に線を引いて視写する生徒もいた。それぞれ独自の読み取り方
をしていた。おもしろいと思ういくつかはプリントして生
徒に配布した。それらを読んで、次の提出の時から感想
を書いて提出する生徒が増え、その感想の書き方も絵で書
いたり、イラスト入りにしたりしていた。視写という作業
はある意味で単調な作業である。その単調さを救う道を自
分独自の方法で見つけ出していた。

この作業も三ヶ月も課すと、だんだん生徒は飽きてくる。
その時を見はからつて、その意義を示して納得させなけれ
ばならない。そこで生徒に配布したプリントは、井上ふみ
著『風のおる道』の中から、夫、靖の草稿の清書を通し
て書く力がついたという主旨の部分（P117～P119）である。
一部を引用すると、

私は日記でも書いてみようか、と思いはじめたのは、あ
なたがまだ学生時代に書かれた『流転』以来、あなたの清
書を書きつづけて来たことにあると思います。（中略）

書くなら今だ、今しかない。とりあえず身近なことを書
いてみよう、と思いました。（中略）書きはじめると、
意外にペンが進みます。家人の留守中に二十五枚書きまし
た。自分でびっくりいたしました。（中略）あとの二十五
枚もやがて書けました。（P117～P119）

視写を通して随筆家として自立していくふみさんの文章は、視写の単調さに飽きてきていた生徒にもう一度その意義を見つめさせる良い機会となった。そしてその後の感想に、「静岡新聞は世界のできごとを静岡そのものに結びつけるのがうまい」など、その文章の書き方にまで及ぶものが出てきた。

六月十八日（木）の授業ノート（授業記録とその感想、悩みなどを毎時間臨番で生徒が書きそれに私が朱でコメントを書いたもの）に、「でも最近、コラムを書いていてかならなのか、文章にも慣れてきました。」という部分があり、私はほっとする思いがした。

意図的計画的、緻密な授業展開の裏に、毎日の視写を置き、本を多く読ませていくという配慮は重要なことと思われる。

三、結果の考察

「はじめに」の所で列挙した実践を通しての要点は、相互に関連して作文指導を実のあるものとしている。

要点(一)の読むことと書くこととの関連を密にさせることは、人間として発達段階にある、人生経験の少ない高校生にとっては必要不可欠なものである。さらに生徒に書くという意欲をより起こさせたのは(二)の指導者の書く生活を深く関連づけたことも理由となっていると思われる。私は

自分の人生における実感に基づいて作文してきた。生徒は最も身近な目の前にいる私の作文であるから、それだけ納得して自分たちも書くという意欲がわいてくるのではないだろうか。

同じように私の作文例を示しても、実践事例五、六は生徒の持つているものを充分作文に引き出すことができた。対象がたくさんの中からお自分に合ったものを選べるという利点があり、またそれは教材の質にもよるからである。即ち、これらの教材はその背後に深く広い世界を持ち、文学を像存在とすれば、自分の読みの主体の様々な角度からメスを入れることができるからである。作文の素材の想像に測り知れないものがあるから豊かなものになったのかもしれない。歌人や詩人と自分の人生を対質させ、歌集や詩集を読み、それについての論文を読み、自分の論点を明確にさせた上で書いていたようである。書き上げた作文に、かなり書いた本人自身満足していた。高校生は感性が豊かである。その豊かさを書くことに定着させていたから、満足あるものとなったのかもしれない。

作文教育において書かせられているという意識を生徒に持たせたら効果は半減する。目を少し変えようと、生徒たちは新しいものに取り組んでいるのだという意欲が出てくるようである。

要点(三)書くスタイル（文章スタイル！心のスタイル）を与えることは文章の形を示すことである。「バッタと鈴虫」を

を読んだ後の対立する概念をテーマにした作文には失敗作はなかった。こういうふうには外から形を与える場合と、「水」に関する作文のように内容から形を与える場合と、「歌」「詩」「女性の生き方」など心から形を与える場合等、いろいろな形の与え方がある。これも一つだけでなく多方向から自然に、指導者としてはその時期を考えて意識的に与えていった方が良いのではないだろうか。

要点(四)書く抵抗を取り除いてやることは、他の要点に支えられてできるものである。要点(五)個人指導！全体指導を密にすることは作文教育の根幹をなすものである。要点(六)書く楽しさを会得させること、要点(七)読みの姿勢の確立を作文によって定着させることは、確かな作文指導の中から生まれてくるものである。要点(八)作文における引用の的確さを把握させることは、「歌」の引用によって実感したものである。要点(九)身近な作文例を示すことは教師の、生徒の作文例を示した方が教室が活きてくる点からいえると思う。要点(十)視写を通して基礎的書く態度を養うことは、無意識に書く呼吸を会得する初歩的要点である。

四、おわりに

本稿は平成三年光葉会夏の学会、平成四年第55回国語教育全国大会で提案した内容の一部である。多くの方々のご指導を賜わった。謝してお礼申し上げます。

(浜松市立高等学校教諭)